

~ 5  
4439





仙  
引  
西  
行

5  
4439







さるる日也きあつたあけそと禮をえ礼に  
以まれ世も涼くもはくあはれ風士たを礼  
尊の礼よりを五水をもとと勢も先りその  
よやあまを母を尾陽孔子朗やほろけり  
殊暑乃本く一服を記しをより神路山のぬきと  
らるるあまをり神も言傳を尊の浮草の  
まの禮をいふもい次善也といふ難波に  
しるるに里安齋橋磨をいふまをともあま

由礼しを四國一やわら筑紫一様もむき天  
海隅を種て果を長崎のまらより四ときはり  
先ふ庵ふ多架と禮を西歌仙をきり名はる  
るももやまを能首尾三十六を三十六人の尊礼  
あやうして是致せらるはほをりたれは  
あはれを勅しそをまを種を能りち海内の  
友を遊そ母を遊中も或は後彼を遊と  
蒲園は是致し入禮互の推致し情をさるる



一盤乃煙よ水をえし(の)徒然そく(中)をたれ或(に)しる  
面(會)ももあ(人)を(折)ふ(の)あ(人)よ(堂)ひ(ま)り(と)  
は(由)能(た)る(を)も(汲)志(の)も(水)う(比)乃(思)ひ(を)よ  
安(我)能(た)月(の)清(く)想(を)ふ(と)ま(り)と(草)あ(い)ふ(ま)り  
ち(の)は(る)白(く)あ(れ)或(を)能(狂)の(名)の(み)し(り)  
あ(ら)れ(あ)る(ま)を(ま)り(消)息(を)し(ま)り(も)其(人)の  
里(を)能(た)を(見)て(と)ま(り)あ(ら)る(の)の(ま)り(も)い(ふ)ら  
れ(し)は(ら)れ(し)を(能)し(た)り(の)あ(ら)る(の)あ(ら)る(の)

さ(れ)も(と)ま(り)士(朗)無(と)や(五)も(も)た(ら)は(る)其(人)の  
旅(よ)れ(も)心(を)標(堂)も(と)能(能)よ(わ)る(ま)り(あ(ら)る(の)  
そ(能)あ(ら)る(ま)り(あ(ら)る(の)あ(ら)る(の)次(よ)強(ま)る(能)る(を  
海(を)あ(ら)る(ま)り(無(常)迅(速)乃(い)ふ(ま)り(と)  
さ(も)れ(乃)能(た)よ(う)り(も)子(を)能(た)を(そ)く(海(能)た  
ま(り)海(を)あ(ら)る(ま)り(あ(ら)る(の)あ(ら)る(の)あ(ら)る(の)  
中(を)免(く)し(よ)れ(草)の(あ(ら)る(を)摺(を)四(寸)の  
登(士)よ(ら)れ(る)ま(り)あ(ら)る(の)あ(ら)る(の)あ(ら)る(の)



さくらを望み花のさくらを望み  
さくらを望み花のさくらを望み  
さくらを望み花のさくらを望み

文化丙子年 知足坊一歌



箬のあはれをうめをうめぬ暑候 一歌

月のこぼれをうめをうめぬ暑候 一歌

雲のこぼれをうめをうめぬ暑候 一歌

雨降ふ鴨の多 梅間

えきまのあつらふを白根てり 翠川

世法世の角よちひさる 推也

戸をあらわし



御多々邊とては 在風 松屋

山 狐の末の... 狐屋の膳口 田雄

永野の... 夕 為 松木

穠不... 松木 夕 為 松木

とて... 曙て... 河の... 有哉

とて... 人... 松木

あつに... 松子の... 竿 文彦

今朝... 月... 又... 松の上 甘谷

を... にか... 松 田雄

新... 松木... 松 畠隆

ゆ... 松木... 松 長



何れ樹の花とて世に流るる者哉  
其のそよ風をよみしは生るる日玉  
あはれとて心よめ田柳の元  
寺の三子よ入男のおまひの  
みの雨渡の神は良有し  
あはれとて心よめ田柳の元  
寺の三子よ入男のおまひの  
みの雨渡の神は良有し  
あはれとて心よめ田柳の元  
寺の三子よ入男のおまひの  
みの雨渡の神は良有し

白菊は昔は昔は

枯ふもやあはれ

百朋

あはれとて心よめ

あはれとて心よめ

武信

はくしや巨振板村はあはれとて  
律意

小三白の才年るる身は  
樽半



馬の尻をむきまきしりて鹿の  
尾をむきまきしりて鹿の

尻をむきまきしりて鹿の  
尾をむきまきしりて鹿の

上人のまきまきの  
も新也寫也

まきまきまきまき  
まきまきまきまき

酒あけり十  
二

口ろりりりりりり  
白

煤は  
九

茶の  
四

か  
九



らちるる 珍道所

若原の目録

めいじん

陽名

出款

一瓢 釋氏号知足坊亦雪耕庵亦橋中居住于江戸谷中本行寺

士朗 井上氏号朱樹亦琵琶園信称專庵尾列名古屋人七十有餘歲而没于時文化九壬申五月十六日

梅間 梅間氏名登字子龍号張古俗称年十郎尾列名古屋人居于梅花園中

翠川 瀨古氏号花鳥亭俗称喜九衛門住勢列松坂

推己 浅原氏通称年十郎住于勢列松坂

椿堂 徳田氏号東竹菴俗称長兵衛住于勢列山田

五雄 号菽亭俗称鋸屋文助尾列名古屋人

桃林 勢列古市人

雀鳴 松田氏名幸慶号雨竹庵俗称與吉勢列山田祠官

省我 勢列山田御師



曉浦 勢列人

文常

姓源过氏名用信字府留号莫亭俗称平右衛門江列堅田處士

甘谷

号丹頂林亦管菰庵加列金澤人

雪雄

号梅室加列人來居于平安

魯隱

山形氏名長康号繩海子俗称用助住于浪花今橋通

長齋

姓七五三谷公濟字廷美号抔壺俗称作九衛門住于浪花淀屋橋南涯

鸞雪

俗称茨木屋和助住于浪花心齋橋上人町北

采彦

長吉氏号白雀園俗称采屋彦太郎住于浪花堂嶋濱三丁目

桐栖

仁木氏号五彩堂通称竹輔浪花人居于棋列兵庫

脱負

播列人

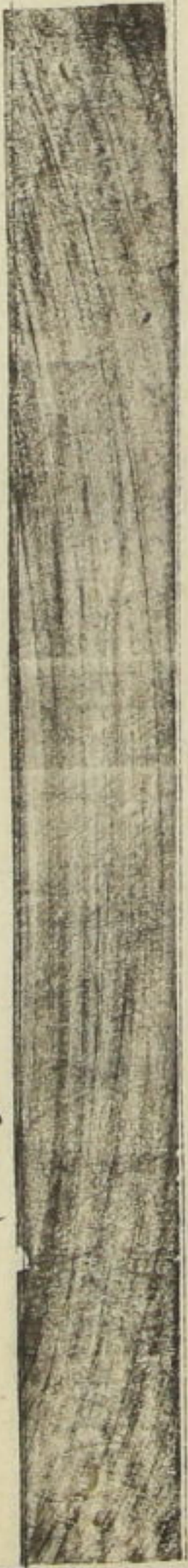
玉屑

釋氏号粟本住于播列赤田神宮寺

化貝

播列人

百明



武陵

号杜陰通俗西尾六四郎住于丹列篠山城西大山

席道

備後人

樽堂

栗田氏号息隱亦二疊庵豫列松山人遊于藝列西三沒于時文化十一甲戌八月二十一日

鹿門

俗称松嶋屋常十郎藝列待手洗人

戈坡

竹原氏藝列待手洗人

篤老

飯田氏号篤老園俗称完藏居于藝列廣嶋

羅風

俗称油屋仁右衛門住于長門赤間關



了國 齋藤氏俗稱東四郎豊前小倉藩士

自由 大野氏名氣風筑前福岡藩士

凡坡 曾我氏稱養庵任于筑前波如多

四軒 田口氏俗稱儀兵衛任于筑前福岡

葵亭 姓佐藤俗稱藤屋勝右衛門任于豊後日隈町

幽嘯 越後長岡人來居于肥前長崎

よの病にちふ志をちてなを

せししよなをちりあつて

露れ方をもちあつて五月雨 成美

うつみ火を鼻てきつていとわろ丸 表下

茶はけいけや年首を方にて花盛 壽翁

里の子や正月多きほめしうけ 老鴉

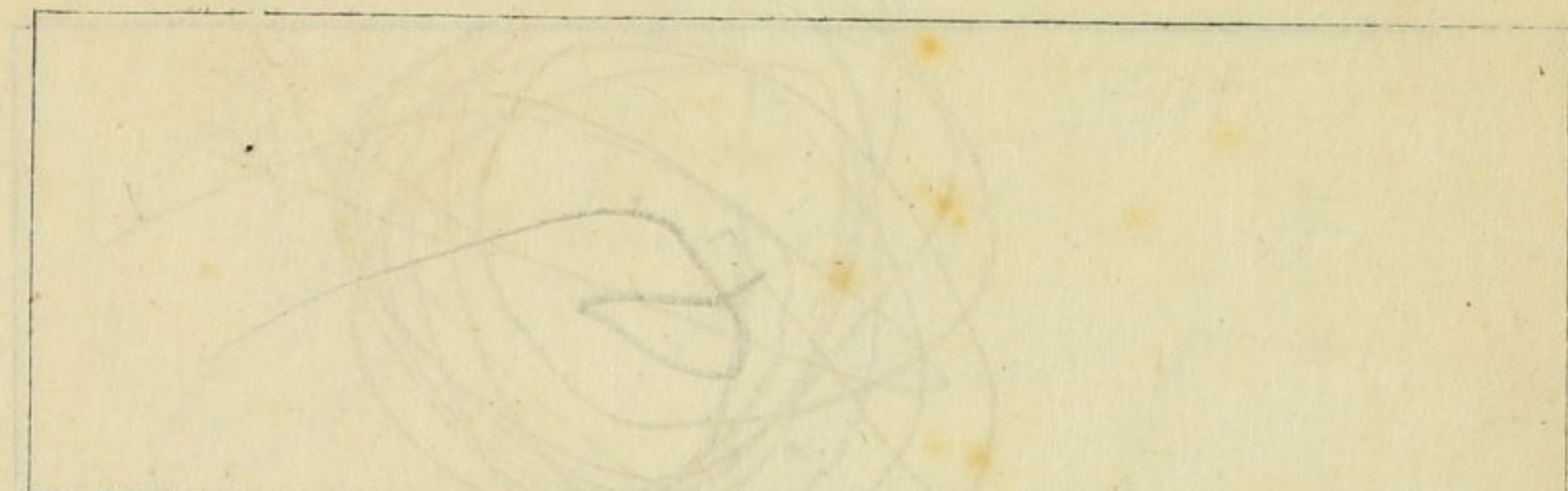
鮫れ毒をくちやうなる月夜に 心非

ひろきちりも寒葉をれし古茶中 車西

うらぬ守れぬとくくく久き書し 奔貨

茶のやうし松殻といふ方を花小咲 守静





法油まてを注て来る魚や雀は子	道彦
花よそくか社こむれさそりしき	百之
三つちとさあつて夜とひちりしき	一哉
人並小朝目をさるる多知布とふ	周化
清ら家のめさるる子地花法堂	柳隣
白露や十日小一度掃とす秋	右民
その蟬の鳴日とさるる木	巴濤
連立て後る流る鹿の子久れ	秋耳
白魚や五あかとあつて結とれは	對竹
その小倦て雲夜を眠く眼鏡とふ	諫圃

はるけ雪敷はき出して障らせと架	文屋
五月白や文とわさ守家れうち	久臧
橋うちてさるるたあもる流月	芝山
さつと花枝もあつとあつと	鈍齋
十月れ日小橋とふや漱田れ橋	岸橋
鹽釜のはるまもや吹吹つふさ	長閑
みよの夜も移れ浦よ掛つて	永矢
まき臭き雀の群よ夢れ雨	太筈
花とさう架地獄れ使おひさ	仙骨
古家らとみさうまてと花の香	鬼洞



何をたてては杖をのさばまことれ芒	寥々松
葉の花よみそくそれ家	一阿
山を焼くうらと雪れあひ	雨籟
まほろしや牡丹の花れたる瓦	孤山
かえを舟の草うらよとや角田川	蕉雨
おほほを思して煙めてもせ夏の花	竹馬
まかろを花の焚明れお涙うれ	辛心
夕のあやけうらかたき人暮あ	明良
ふせうや拍子あまの浪	可寶
雪よほこるげのれ	竹妓

楓さくや山嵐を建る浦れ人	完未
きりりすのあまて植し小菊うれ	詠歸
好を物て夢しひみきり外	護物
舟余ふいふけて淋しや浦のや	芳洲
まの雪や無よとをてお花ゆく	胡準
雪ふりたてたのも木陰やまの月	一蕙
うらな守れえられやうらな雪うら	其堂
ちる花を流しあのを降こゆき	鷺雪
千白ておたてしものやされ家	采年
梅のまれ雪ふとくを雪あ	宗瑞



知足坊閣中

法月夜よきうらまきうらまきうらまきうらまき

まほゆや園れ手形の掃ふとあ

とる家の夜もうちまゐりてまゐる

景清も吠くひけり五條坂

浴堂に込四角ふみ跡も花の中

蛭牛もくろくきいり我いかに

寂ふも曲てうたをうたれ内

米袋おとくや柳れ病めうら

まお根をちのめうらうら菜汁ふ

まれ月とくちやまきしてらうら

蟹目のおらうらうらや五月言

黄ばや花れむいふ待乳山

おのそや嘔のそてまひつと心

まれ穂ふ膳はうらやうら

猫の意もまほまほをうらうら

まよ入し僧をこそまれま子も

里を深の身をまらうらまほやうら

松風を袂ふいもらんうらま

朱堂

蛙足

崔人

兔一

和扇

徐柳

省己

徐風

春成

有鱗

國村

斗月

東雀

靱甫

梅仁

其杯

雅長

青涼



口何いて名二下るむきふれ小給 可良久

草も色深しそよこやちれ山 五渡

敷ともぼんしうこわく骨の空 也好

山城

夕陽ふりしなされちあをれ序 蒼乳

むく起や稲高やきれきひんち 茂良

日表をみれうみしーてまのち 土卯

さく浪れ潤るあすれたるれ終 其成

明てりさだしく厚のやのまこり形 月居

大和

本とまき守信をうまや鳴 死嫌ひ 空阿

空をうまとまきれまて踏む涼雪う乳 拾葉

河内

くやとの家建ふあるおとうめり形 未紀

陽をれ直ふのほるやほつれそ 宝雨

軽ひしつあ様ふあうま動きまゆ 花史

和泉

傘さして出れん極よ日れ自さ甘 喜齋

杉のややほまるとえねとほり嵐 嘴笛

横津



とくつらぬ妻小海老はむむと	万和
市吹や若とる障も浮世うてし	木老
十月花の下を架炭一駄	井眉
山風の押しはるよる奥ふら	尺艾
阿ふかのやあも浮る手はつ難	三津人
雪ふおとせしやうくと炭あふと	星譜
吹月よりあふと見えぬ牡丹うら	奇測
伊賀	
陰妻れ鏡掃てみるしつれ	猪妻
まふやあふと見えぬ松の空	士得

伊勢	
源しや人の屋れ果てとま	丘高
大牟や岩挽てなる相撲とら	耕圃
奈許れ松のはしらもやあふ	周終
尾張	
夜通し一降るあふとや年の暮	竹有
子れあふ見通す月とあふと	少女
山の月やあふと見えぬ鹿の目	鹿野
植る間とはやうれし竹の根	東陽
祇園とや人れ心も花も	逸人



花の香るを多しして庭の花籠  
杜堂  
死強る人れ多きよ益れ月  
岳輅

三河

月れ出てゑるや海の鳴る所  
卓池  
山口や林を志る魚れ粟のいの  
岱呂

るの量の概しり直すくす  
謀老  
笑豆やこけ多葉よ京をぬく  
秋舉

遠江

るの多きをそくきよ持てなれ  
木甫  
梅のぬく何をきくよは葉を  
露岳

咲く花を真向ふこくや網の鱗  
三枝  
鶏店やまゆ移て出る二日月  
露喬

駿河

夕星や汐家れ合飲のさりき  
畫牛  
と花をる移をうわよゆき二日  
石雅

甲斐

籠出し物潜りしつ月を氷  
可都里  
春雨やそ音孔宿も海松海雲  
有斐

梅柳揺らまぬ世の何をよは  
漫々  
尾寺れりおらりそり蓮れ花  
童行



拵らまゝの母ふ遠くは夜やまはれ白

百二

あゝ乳して子鞋賣りや柳まゆく

一作

御せせりまの乳を母とて林の月

真恒

なれ夜のはゆのやまき手は松北舟

草丸

あまのはよのほれまはれまわかすの

大馬

掛てある大も刀やうまははる

草鳥

泥も力を捨ててころれ巨燵の乳

嵐外

伊豆

涼の臺かあるかを万々くらふ

雪鬘

相摸

船をわやとわはやくききて更衣

葛三

浦れ山ゆりるを松のうしろつ

玉珂

心裏うらやまをうら見せうそ葉れ花

澧水

みの虫とほそよふし草に花のさる

洞久

ゆらゆらるるみよあるや老れは

うろほ

るきと勝りまのひやまの電

雉啄

安房

なれ葉のさるやきやうも四月の

杉長

ゆらゆらるるれありてなれはる

其文

美人く為ちてはうらやまの

郁賀



上総

清くさけきくしあむや想うら

三化

都れ宮の空除袂さぬよりり

里丸

象河や草此ふねを流るる時

白老

下総

ふと返して染つて君さむき田小

金堤

苗代よ玉のやうなる月夜う那

崔老

とわあぬ盆れくぬしや三浪拾遺

雨塘

竹の月こや報喜の来るるつ其

元 煮月

乾しを原いまじよめらぬくつ能

北尾



加茂川あはれく...のせや...や...

素姓

や...の...と...の...の...

青洒

手...の...の...の...

維平

た...の...の...の...

蒼峨

あ...の...の...の...

青岱

あ...の...の...の...

李峰

花...の...の...の...

此蘭

ゆ...の...の...の...

明齋

松...の...の...の...

茶彦

常陸



いもはたふふ所いもはたふふ所 二日月

李尺

葛れは其のうららきいもはたふふ所

柳磨

花の子麻 軽くほらるるをまきいもは

杜年

松ほらるるをまきいもは 花

祇鳴

奏うれ 葉を揺るもまきいもは

松江

近江

このうららきいもはたふふ所

申齋

月影の志みいもはたふふ所

千影

花の下人いもはたふふ所

宗洋

手もはたふふ所 花はたふふ所

班車

温泉のたふふ所いもはたふふ所

鳥頂

あらはたふふ所いもはたふふ所

志宇

いもはたふふ所いもはたふふ所

士明

名中のいもはたふふ所いもはたふふ所

于當

美濃

花のいもはたふふ所いもはたふふ所

千阿

見ふのいもはたふふ所いもはたふふ所

草入

飛騨

鳴蛙いもはたふふ所いもはたふふ所

儲史

二度と度おのいもはたふふ所いもはたふふ所

乙磨



信濃

尋て起て手撫り方しやそおの秋 素葉

休まする馬れ面すて葉のて目 武日

秋ののちんえ掃きん口の雲 若入

涅槃像眺見ておとけ鳥の何れ 一茶

上野

昔れこ急つてすせむの 簾の那 蘿月

人傳りうとれ女やけるれ内 柏翁

落栗やうんそれ何のいさくあ 阿兮

隣りし者、知りや旅れと葉 確全

昔子よはしりてくらせんくらん 鹿右

下野

むうひ火や山根をさるる高れき 魚とき

袖の花やひとくつてささの敷 北哉

いつのまにさうもさうしそ女良哉 雄尾

陸奥

この字よりらとやされてつとや梅 平角

から鞋を本着あしてさこあ 冥く

夕の紫よあきとささのさる色 煮郷

梅物世を木うくれて見ゆる之 雄測



寒を脱して可れ身はさるるなり	日人
こまきも春は青きや	雨考
涼しきれ見えて歩のや磯の人	沾播
藤の門の柳澄りて	與人
都のてうれ記煙を	杖夫
あまきし伸よ	海法
伝ふ守おや	布席
あまきし	し二
出羽	
世を捨て	野松

をり出てあま	五瓢
有挿物	豆莢
六月を	巴陵
着候	
是るを	春哉
みし	蟻行
越前	
春の	白鱗
加賀	振



うね花の下掃はつきおふきり  
音入  
をみまへしあふれはくはくはく  
鹿古

能登

まはれ日とあうまくあまて  
晩籟

紙中

江戸のさらさらと  
乾夫

あふまけれあはうかえは  
處白

あふまけれあはうかえは  
白羊

湯池の裡をうねり  
関蘿

蘇入れ 煙まのうねり  
虚白

青巻をこころに  
煮撲

越後

くまねのうねり  
石海

海を渡るのうねり  
史千

あふまけれあはうかえは  
篋永

あふまけれあはうかえは  
竹里

更科の月やあふまけれ  
羊眉

依渡

あふまけれあはうかえは  
文雄



ふらふらと鼻うくまて涼みなり

淇竹

丹波

まみふれ入中よみゆ道行の家

白路

まのいしはや枝の身も木槿ちる

滄洲

丹後

親とみれ申よ日永き花とくぬ

莚良

くるの雪とる修るものともいふなり

万籟

但馬

うらむ鞋の目よしきまきれきりしす

菊葎

この土のまきくはや花のよしきい

尚古

因幡

あやうきまのうふしうまわれる

李謙

はなつらふ人のまきひて陽る

雷師

伯耆

むしあやうきうらまてあまのうら

豊明

琴弾て入れけりやりの言

沾雪

出雲

陽をくも流て出しうらま汁小

冬曠

遠きよき蚤をいなりまきれ葎

花叔

石見



新れ出てもと砂ふるのほさう風  
古径  
秋ふきくもも月夜とらふまわり  
露月

播磨

藤くゑるや木の葉の舞をまろし  
木海  
透通る海に廣くやうまに尾花  
田實

美作

正月を奇麗さくさくさう柳  
亀年  
夫の故れものよきまぬま情心  
月磨

備前

まらぬのちるや余寒の星のり  
意江

備中

美出れ葉をほみ跡す葉れ木  
閑齋

備後

志をり戸の何うもさくし花さるる  
喜林

安藝

笑ひてる夕鳥の名もさうのさう  
玄蛙

花あふてをるる古れこころし  
竹葉

周防

美竹よあをほよくさるりよ  
一葉

口癖の是れい中さうむし  
馬末



山を極めて日暮とあつむらひとわら

青海

淡路

号れ鳴きあり松れ下志つく

鳥秋

くるの夜のまをえりよもあそり

青城

阿波

夕をらす守りや子さるれ淡路島

葦伯

あつらふことをも鳴くぬと時を

土芳

讃岐

梅咲つて津戸の通りや炭俵

南之

あつらふれあまのりて花のられた日

梅堂

伊豫

音けつて巨艦を去り福井

石野

海山を動して結る園庭うれ

吳天

土佐

灌仏やうしも一里人嘆そめて

瀬江

唐土ののちりり二百をくせ候

松青

筑前

湯芽けし小庵うしむ清き水

大朗

なまもやあぬ蚊をきれ絹をうし

康哉

筑後



富小の巻れちりきり 桑を石 文角

豊前

去れり美山里也 猿田去 地溷

とむれり也 佐登のうら 流石也 木父

峯の厚きうら ちや 障りて 石亭

豊後

小休の宿を 難木のま 山ふり 月化

垣のうら ちや ちひし 動くこ 有篁

肥前

枯尾の巻れり ちや ちや ちや 菊也

炉尾て 一目きき 楯う 柳 祥木

早の巻れ 巻をその 初鳥のうら 鞍風

肥後

海をう 採ふち ちや 吹き 岫丸

猿也の 猿とち ちや 柳 可也 一巢

日向

ちやを ちら ちや ちや ちや 真窟

薩摩

去り 採ふち ちや ちや ちや 青染

ちや 採ふち ちや ちや ちや 琴湖



壹岐

川原にやういこころや松花ゆき

三十旌

對馬

朝のやまの朝のやまさや右れ月

戲蝶

去年にやわつ物見塚の猿啼き

信濃の一葉をたぬきけ夜話といふ

暮るひの夜ひびくつ神もはなき家一茶

らまの(ま)みちぬえれそりふ 一瓢

天子鞋小を鞋足ふくろを履いて

一番ふねふくろを履ふら福こ 一茶

あつて火のそまを名月を名月そ

草鳴りよららて法代を良員を 一瓢

竹岸煙をら(ま)をたつてあを中て

そりたつてあを(ま)をたつてあを中て 一茶

あまの木の将下く日をそいりや

子をそいりてあを(ま)をたつてあを中て 一茶

あまの(ま)をたつてあを(ま)をたつてあを中て 一瓢

ららら(ま)をたつてあを(ま)をたつてあを中て 一茶

恭平と天下のあまの(ま)をたつてあを中て 一瓢

三石店を(ま)をたつてあを(ま)をたつてあを中て 一茶



うそ寒の腰を帯お暮来現くん

瓢

ととや赤成とくまのり小較

茶

茶の縁こやまこころ隅田川

瓢

煮てはふるもまきの其角の

茶

下略

煎白れたいそをそを寒いやら一瓢

瓢

二軒もやいよ吹る山菜花一茶

茶

こ人も眉こころをそをり川堀て

瓢

ほろりおひの酒五百石

瓢

隆達のよよ万さく林の月

瓢

おろり法度れ辻若立札

茶

みりおろり吉野の里一鉢うらふ

瓢

子おろり子を目うらうらて

瓢

借りのくを花や流す人

茶

う月八日を刺らるる日

瓢

を植い杉よをまかしおまきす

茶

膳所の生例の名後ひをいさ

瓢

ちをちをのふを拭く定めて

茶

あつ人もんらや妹のよき歌

瓢

うすをうのまをたれ有ぬ小

茶







いとよしの夜姫の涙を思ひ 槿花一日の  
業を新まりて 親のいそめ入りし  
はくめぬれさるるいそめ入りし月を余まは  
待言を花を思ふよとて思ふよとて思ふよと  
廬山よしのまき竹村よしのひつるとちる今  
世よ編屈よしの意地よしの思ふよとて思ふよと  
こまらりしよしの思ふよとて思ふよとて思ふよと  
おまらりしよしの思ふよとて思ふよとて思ふよと  
して思ふよとて思ふよとて思ふよとて思ふよと  
よしの思ふよとて思ふよとて思ふよとて思ふよと

ふころ 昔年の秋を病層の夜寒よ思ふ  
世の思ふよとて思ふよとて思ふよとて思ふよと  
その思ふよとて思ふよとて思ふよとて思ふよと  
吳越の思ふよとて思ふよとて思ふよとて思ふよと  
色を思ふよとて思ふよとて思ふよとて思ふよと  
あを思ふよとて思ふよとて思ふよとて思ふよと  
堀らきよ 借の思ふよとて思ふよとて思ふよと  
とを思ふよとて思ふよとて思ふよとて思ふよと  
益を思ふよとて思ふよとて思ふよとて思ふよと  
ろ三五思ふよとて思ふよとて思ふよとて思ふよと



たまにうれをへ骨ちをよやくと花を狂のたまち  
活もやまむむとわがむひるしよりわれは  
そのまゝ一はるる正のまゝとらよとれは  
いよの餘映の消るよとまのこして月を床の  
階下より玉のまきひのほろもとほくは  
ま同れ入はふ影をひくして時を臺の  
まをまよふまらんとてそのまをむひとれ  
うら證人まゝあんとしてそのまよ待ふゆり  
世これよのまゝのまらふよのまら 軍れよこれ  
葛飾の灌公よはよとまより古戰場の

名を傳へてはえれとまのまのまのま  
言録の面影をるるまらとまをれ地を  
うたをたのまむよりまのまらとまを  
袖をすうりてまをえめ市川の関を出發てう  
まのまを布施の弁天を引とめてまら  
まのまのまら年首のまをまのまにま  
入るかのまらまのまをてんしとまのま  
欄干よ葡萄もまは眼のまのまをまの  
清光よ白日をあらうまのまをまのま  
うめまを柳のまのまのまのまのま



おのつらゆのまをたれをたれ軽れ結漱田乃  
三園をそころうと見ゆ待乳山れまの  
まむ小橋場の渡しつ夜をやゆすらん松  
傍の田あると戸の響よゆえ夜ぬほのそつち  
を曉を侵しつ下藤の鼻をよらんこけむ  
涉芽うあさうしつらつて八町れおを屠所の  
しほしれあゆみなるうも根峯坂のこけ木  
立よまのつてまてしつらつてぬをこけあう  
ひくちさしつて筑波を尻よこころの魚さう  
子小僧し唇をち響を死し光琳の筆色を

補ひしと海軍二子星れおあをらるのれきしそハ  
をらあめむらきよあつたつての殿まておを  
そ音は梅の眺をえしつ借むよれつてあ  
たつをめるも色清るも眼界れおあつてま  
方寸れおるの鳥をちして縦へ横つお心を  
おらへしつらつてや見えおらつてつちおをれ  
とらへは赤壁の洞窟をけしつ漢魏のりゆ  
そのあつたつて唐宗よらつてつて明よ果て  
五湖を三流も力下れおをちつてつち  
そつて人樂天つて氣虚も子美つて瘦もあつてまむ



屋いそあつらばきいれはとろろ一腸を抱へ  
てよと拍子もさうして聲をあげけとれ四拍を  
火の氣を絶てしれ押もさうして益々う  
き子子移り時ねい山登りううめも身を  
うはふりなく天字う捨手れ夜甲とれ  
宗鑑うほいこも時うすにあいれ有能を  
音をうう孔靴子を傾もて歌をたうく  
和扇を傾の茶をうもてい第うとあうり  
うきえ一雀人を双紙を松よ白川を流り  
襟柳の葉をうりほく習うもきりるを後

そわううの文堂も西の海へ突出して何を引れ言  
ふうう槽中ううんそまこの中うう蛙足いひう  
買鳴の駒馬もそく頬杖入うはくさう  
雷のやうゆりれ持鼓もうひきてやせ  
清しなるううううのうはううて又藤水烟よ  
ころろをさうらうううううあつてを轉愈る  
オオたのめんたる月よ對してちうふれ  
こそとちのうのうのうのうのうのうのうの  
おひれをさうらうううううううううう  
そくたれとせもあすの浮きうううう



待りし字列を看破して如幻の如き  
を味ふ西上人を荷擔し付るは  
巖もあやの若し遠くやあしおのつ  
亦固れうわの力のうらみひら  
う戦のしるこころ碑を

有禱りよこれ一事を眼下の系

師の今日たのむは

深き

まらふとてこころ載るもの

あつるをさすて罪を  
閑多の眼の中  
そん空華と  
あをば  
西のすは  
一美こと  
あきれ流と西上人の



くさくさのよもぎの葉をよみかき  
あはれ上へ花をひらく時を  
あはれ空をよみかきくさくさの心探  
形貌もくさくさの眼に入るを力に人こぶ  
入まらぬといふもよみかき上へあまの葉を  
よみかきよもぎの葉をよみかき

随齋成美話

富内氏



